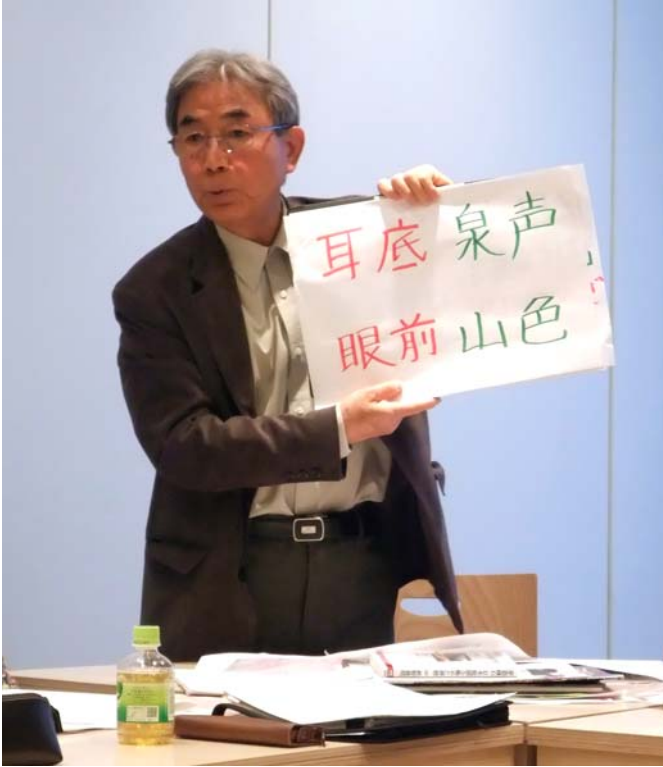


漢詩2首「刻三溪石偈」と「臨川寺」

漢詩分科会のメンバーから、三溪集に収められている漢詩2首について報告がありました。

「刻三溪石偈」 発表者：小林一彦



刻三溪石偈

圓而不轉 靜而不休 相顧相笑 泉聲塔影
短くて簡単そうに見えて、実は解釈の難しい漢詩です。まず題は「三溪が石に偈を刻む」ではなくて「三溪の石に刻するの偈」と読みます。偈とは、禅僧が残した言葉をいうようです。では、三溪園に「偈が刻まれた石」があるのでしょうか？ 発表者は三溪園中を探しましたが、それらしき石は見つかりませんでした。本文を訓読すると「圓にして轉ばず 靜にして休まず 相顧み相笑う 泉聲、塔影」となります。円いが転ばず、静かだが休まず、とはまるで禅問答のようです。三溪園を訪れたお客さんが相顧み、相笑うのだとすると、前の句とうまく繋がりません。すると「顧み、笑う」のは泉と塔でしょうか。庭をつくるのも禅の修業のひとつと言います。三溪翁が尊敬した夢窓国師の庭づくりが、三溪園に影響しているのではないのでしょうか。

「臨川寺」 発表者：大川道子

臨川寺

也訪臨川寺裡燈 磬聲隔竹與秋澄
古龕千歲香烟鎖 內有南朝趺坐僧

三溪翁は大正期に京都嵯峨野の臨川寺の北隣りに田舎家の別荘「隣花庵」を構えていました。臨川寺は、後醍醐天皇によって、亡くなった王子世良親王のために、夢窓国師を開山として創建されました。夢窓国師はこの臨川寺で亡くなり埋葬され、開山堂にその木像が安置されています。訳は「また臨川寺の本堂の灯かりを訪ねて来てしまった、竹林を通して流れてきた磬の音色は秋の気配と與にいっそう澄んで聞こえてくる。長い時を刻んだお厨子は手向けの香の烟に包まれて更に古色を帯びている。そのお厨子の中にはかの尊敬する夢窓国師が今も尚お座りになっておられる」。現在では臨川寺を訪れても非公開のため中を見ることは叶わず、隣花庵があった場所は宅地として開発されているようです。

